

# 「保育・教職実践演習」の取り組みについての一考察

本 村 弥 寿 子

A study on approach to the nursery・teaching practice exercises

Yasuko MOTOMURA

キーワード：保育・教職実践演習 授業内容改善 学生の学び

## 1. はじめに

近年、核家族化や地域コミュニティーの脆弱化等で子どもを育てる環境は大きく変化し、子どもの虐待、いじめ、社会性の低下等、子どもに関する問題が多々出現している。そのような中、乳幼児教育の重要性が確認され、適切で専門的な乳幼児教育や保育が求められている。よって、これから保育者として現場に出る本学幼児教育学科の学生たちも大きな責任を担い、役割を果たさなければならない。

本稿は、保育者養成の最終段階に受講する「保育・教職実践演習」の試みについて述べたものである。本学で乳幼児教育・保育を学んだ学生が、社会で責任を持って任務を確実に果たしていくために、「保育・教職実践演習」で何をどのように学ぶべきか、授業を振り返ることで考えたい。

## 2. 「保育・教職実践演習」について

### 2.1 授業の概要

科目名：保育・教職実践演習

受講対象：幼児教育学科2年生

開講時期：2年後期

授業区分：幼稚園免許必修、保育士資格必修

科目の主題：保育に関する知識や技能の更なる修得と向上を目指して、保育現場での実習を振り返り、意見交換やグループ活動などを行う。

### 2.2 授業の内容

#### 2.2.1 平成22年度～平成28年度

本科目は、平成22年度より教職課程・保育士養成課程の中に新設された、幼稚園教諭免許・保育士資格を取得するための必修科目である。そのため、毎年2年生約100名が受講している。授業は、2年生を2クラスに分け、1回90分の授業を15回行っている。平成28年度までは、内容に応じて担当教員がオムニバス形式で行っていた。平成28年度の授業計画は表1のとおりである。

表1 「保育・教職実践演習」授業計画  
(平成28年度)

回	内 容
1	オリエンテーション 学外実習に対する自己評価
2	自分の保育観（保育者・教師としての使命・仕事への責任・子どもへの愛情など）に気付く
3	保育者と子どもの関わりを考える
4	保育者と保護者の関わりを考える
5	指導計画案を振り返り、子どもの発達を踏まえた指導計画の立て方、クラス運営について確認するⅠ
6	指導計画案を振り返り、子どもの発達を踏まえた指導計画の立て方、クラス運営について確認するⅡ
7	からだ遊びを計画する
8	からだ遊びを実践する
9	弾き歌いと手遊びの技能を高める
10	音楽遊びを実践する
11	子どもの表現活動について確認する
12	子どもの表現活動を実践する

13	乳幼児の保健・衛生について確認する
14	現代につながる保育理念と思想 －倉橋惣三の保育思想を学ぶ－
15	保育者としての使命感や責任感、子どもへの愛情などについて確認し、自分の目指す子ども像を描く

内容は、各担当教員に任せられ、教員それぞれが、保育者養成の最終段階において学生に習得させたい内容を考えて授業を行っていた。よって、保育者として最小限必要な資質能力を、学生が改めて確認し、確実に身に付けていこうとする意欲は高めることができていたと考える。しかし、年数を重ねるごとに、「以前授業で習ったことと同じことをまた習っているのだから、この授業を受けるべきか考えさせられる」とか、「記録の必要性とか書き方の確認になったけれど、具体的に、自分が実習で悩んだ点に関しては解消されたとは言えない」などの声が聞かれた。つまり、これまでの学びが理解できている学生には、この授業を改めて受ける必要性が感じられず、学生一人一人が実習で捉えた課題はそれぞれ異なるため、講義形式の授業で教員が一方的に授業を進めるのでは授業の意味がないと感じる学生も存在することが見えてきた。

そこで、「保育・教職実践演習」の目的や意義を教員自身が再確認し、授業内容を改善することを目指した。

### 2.2.2 平成29年度・平成30年度

「保育・教職実践演習」では、開設当初から、第1回目に“実習についてのアンケート”として学外実習の振り返りを行わせている。その内容は以下のとおりである。

〈実習についてのアンケート〉

1. 園の先生方の保育で素敵だと思ったところ、違和感を感じたところを挙げてください。
2. 保育の仕事にやりがいを感じましたか。また、それはどんなとき・ことですか。
3. 自分が実習中に意識して取り組んだ課題から学んだこと、得たことを書いてください。
4. 園の中に特別に配慮が必要な子どもはどのく

- らいましたか。どんな配慮を心掛けましたか。
5. 実習に行くにあたって準備したものを挙げてください。
  6. 部分保育や設定保育で行った内容を挙げてください。
  7. 子どもと接するとき心掛けたことを挙げてください。
  8. ①乳児期の子どもとの関わりにおいて難しいと感じたところを書いてください。  
②おむつ交換（排泄の世話）や手洗い、食事の準備において心掛けたことを挙げてください。
  9. どんな指導案（週案・部分案・日案等）を何回かきましたか。その内容は簡単な内容でしたか。具体的な内容でしたか。
  10. 指導案の様式は、講義で書いた指導案と同じでしたか。違った場合はその違いを書いてください。
  11. 指導案について、指導されたことがあったら書いてください。
  12. 園ではどのような保護者支援、子育て支援が行われていましたか。

このアンケートは、学生の実習先が様々あるため、学生がどこでどのような実習を経験してきたかを教員が把握することに役立つと共に、学生にとっては、実習を客観的に振り返って、自分がどのようなことを学び、何を課題としているかを確認できるようにしている。「保育・教職実践演習」の新たな内容を考えるにしても、これは従来通り取り入れることとした。

今回の改善では、大きく2つの柱を据えて授業を進めることにした。1つ目は、学生自身の課題解決に向けての取り組みである。本学の学生は、実習先である多くの園から、“素直で、教えたことを受け入れ、積極的に行動に移す”という評価を得ることが多い。この姿は本学での授業や学校生活の中でも見られる大切にすべき姿である。しかし、自分で問題点を捉え、その解決に向かって行動するという点においては力を発揮できない者が多い。近年、アクティブ・ラーニングの形態をとった授業の大切さが叫ばれ、良く取り入れられ

るようになった。そこで、「保育・教職実践演習」で、学生が実習で見出したそれぞれの課題を、自分なりの方法で解決の方向に持っていくアクティブ・ラーニングを取り入れることにした。

2つ目は、子どもや保育の素晴らしさに改めて気づくことである。多くの学生は、実習を経験することで、子どものかわいらしさや持っている力の素晴らしさ等を目の当たりにし、保育者への道を迷うことなく進む。しかし中には、実習を経験したことで保育の難しさや子どもと関わることの大変さを痛感し、不安感が増すものもある。前者のなかにも、「本当に保育者としてやっていけるか」という不安感はある。そこで、子どもと関わったエピソード記録を書き、その時の子どもの心もちや自分の思いを改めて考えることで新たな発見を導き出し、保育の面白さに気付かせたいと考えた。以下の表2に、大きな2つの柱を据えて改善した「保育・教職実践演習」の内容を示す。

表2 「保育・教職実践演習」授業計画  
(平成29年度)

回	内 容
1	オリエンテーション 学外実習の振り返り
2	保育実践記録から学ぶⅠ 倉橋惣三の保育理念
3	保育実践記録から学ぶⅡ 具体的な子どもの姿から考える
4	保育・教職実践演習で取り組む自己課題の発見
5	自己課題への取り組み方法の探求
6	アクティブ・ラーニング① 自己課題解決への取り組み(資料収集・学外調査)
7	自分の保育観(保育者としての使命・仕事への責任・子どもへの愛情など)に気付く
8	アクティブ・ラーニング② 自己課題の進捗状況の報告
9	アクティブ・ラーニング③ 実習指導教員とのグループディスカッション
10	自己課題報告書に基づく実習の振り返りと、実習経験をもとにした実践記録の考案
11	保育実践記録から学ぶⅢ 実践記録の作成
12	保育実践記録から学ぶⅣ 実習指導教員との事例の掘り下げ
13	実践記録の発表(ポスターセッション)
14	園長講演会「保育者としての心構え・期待」

15	保育者としての使命感や責任感、子どもへの愛情などについて確認し、自分の目指す保育者像を描く
----	---

## 2.3 改善した授業の実際

ここでは、改めて取り組んだ2つの柱について述べる。

### 2.3.1 自己課題への取り組みについて

これは、4回目から9回目までの授業で取り組むよう計画した。途中の7回目に、本学教員による講義を挟めているが、約1か月間かけて学生が自分で課題解決に向けての学びを進められるようにした。

まずは、「実習アンケート」等より振り返った中から、就職までにさらに身に付けたり理解を深めたりしたいことを洗い出し、それをどのようにして解決の方向へ向けるか考えるところから始めた。これは、図1に示す用紙に記入し、第5回目の授業時間に、本学の実習指導担当教員から個別に指導を受け、課題と解決方法を明確にしてから取り組むようにした。

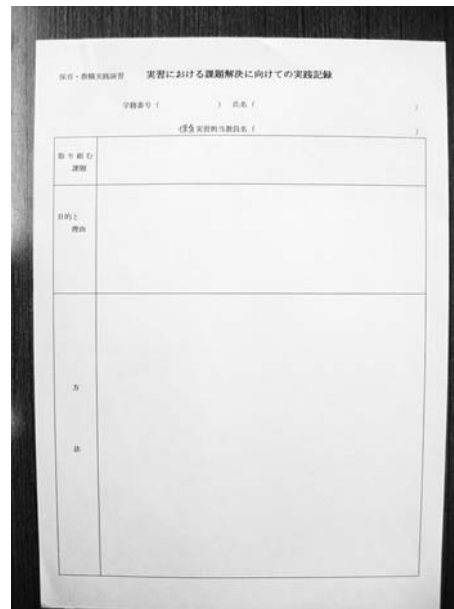


図1 課題と取り組み方法の記入用紙

実際の取り組みについては、実践記録として残るよう、図2の形式に記述するようにした。調査内容等を詳しくまとめるのは、今後学生自身が活

用しやすいよう、図3に示すように、別にまとめたりファイリングしたりするよう助言した。

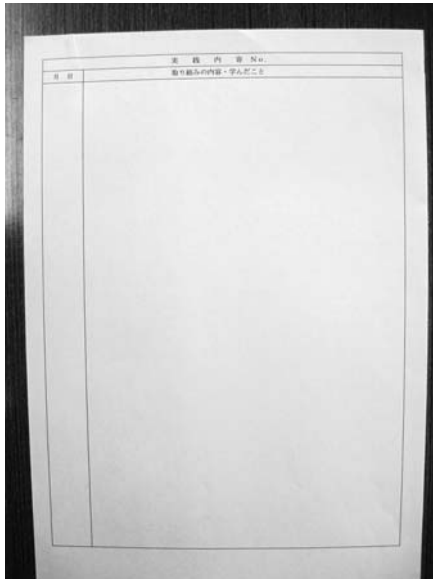


図2 課題への取り組みの記録用紙



図3 調査結果を自分なりにまとめたもの

この取り組みには約1か月の期間を確保した。学生がしっかりと課題に向き合い、自分のペースで解決の方向へ進めるようにするためである。ただ、学生によっては、期間終了間際になって慌てて取り組むことが考えられた。そこで、進捗状況を担当教員に報告する機会を持った。報告の時間を設けることで、早めにできるところから取り組んでいたようである。

報告時、学生は「これでいいのだろうか」と、自分の進め方や調査結果等に自信を持てずに来るものがほとんどであった。そこで、教員が学生の考えや取り組みに丁寧に向き合い、人と違ってい

て良いことや到達点の一つではないこと等を伝えながら認めることを重視してきた。また、期間内にすべてが解決に至らなくても構わないことも言い聞かせてきた。その結果、翌週のグループディスカッションでは、約10名のメンバーの前で堂々と自身の取り組みを発表したり、友達の取り組みに対し、臆せず意見を述べたりした。実習で様々な経験をしてきているためか、話に説得力が出てきたように感じられた。さらに、人の意見も自分の経験と照らし合わせながら聞いており、理解が深まっている様子が見られた。短大教員も、担当した学生のみであるが、学生が実習で何をどのように学んできたのか、そして、今どのような考えを持っているのかが把握でき、学生理解が進んだように思われた。

課題への取り組みのまとめとして、図4に挙げたように、“取り組みの成果”と“今後の課題”を記述させた。保育者として現場に出ても常に課題は出てくるものである。そして、課題の解決も、解決してしまうということはないだろう。この1か月間取り組んだ課題に関して、今後一層良い方向に進めていくという思いを持ってほしいと考える。

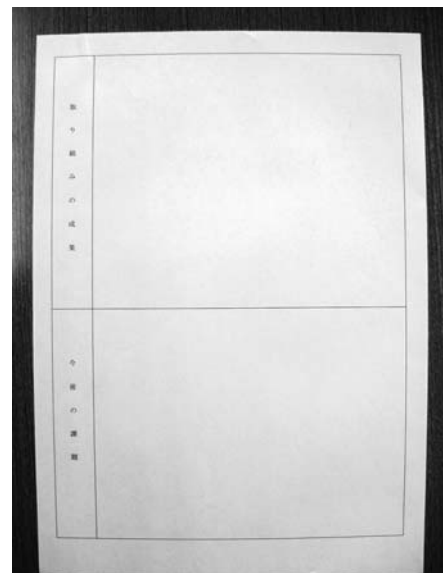


図4 取り組みの成果・課題の用紙

### 2.3.2 実践記録の作成

この取り組みは、10回目から13回目に取り入れたものである。

学生は実習中、保育者としては未熟であるものの、真剣に子どもと向き合い様々な学びを得てきている。子どもと向き合った経験をエピソード記録に書き起こし、その時の子どもや自分の心もち（内面）を洗い出し、保育の面白さを改めて実感したり、子どもや保育を客観的に眺める重要性を理解したりしてほしいという思いで取り入れた。特に、多面的に子どもを捉えることの大切さを理解してほしいという思いから、最終的に事例をポスターに描きあげ、自分の学びを端的に人に伝え、様々な意見を聞き出すポスターセッションの機会も取り入れた。

事例（エピソード記録）を詳しく書くことは初めての経験である。教員が例を示し、抵抗なく取り組めるよう工夫した。それでも、事例をまとめることのできる学生とそうではない学生と、出来上がりにずいぶん差があった。しかし、この授業では、事例の書き方ではなく何を学んできたかが重要であると捉えていたため、教員が話を聞き出し、その事例で何を得たのかを学生自身が的確に捉えられるよう助言することを心掛けた。このような関わりもあってか、学生の描いたポスターは、どれも内容が伝わりやすいものに仕上がっていたと感じた。

また、保育では、保育者の思いのおりに進むときもあれば、思わぬ方向へ進むことも多い。ど



図6 学生の作成したポスター

ちらにしても重要なのは事後の考察である。よって、学生には、思い通りに進まなかった事例でも構わないことを伝えておいた。ポスターセッションを振り返ると、学生の言う“失敗した事例”の方が、学生同士一層共感し合い、話が進んだように感じた。

### 2.4 改善した授業の成果と課題

自分で課題を見つけ出し、解決の方法を考え活動を進めるという方法は、学生にとって経験のないことである。そのため、授業を始めた当初は、不安げな表情で受講したり、事あるごとに質問に来たりという姿が良く見られた。しかし、授業が進むにつれ、“自分なりに取り組めばいいのだ” “答えがはっきりとあるわけでは無いのだ” という思いに至ったのか、それぞれに自分の取り組むべきことに集中するようになった。第9回のグループディスカッション終了後に聞かれた声に、「始め、何していいかわからなかったけど、やってみたら面白かった」「自分が調べたいことだったから、苦痛ではなかった」「人の話が聞けたから勉強になった」というものがあった。ポスターセッション後も同様で、「私も同じようなことがあった」「みんなそれぞれ勉強していて、すごいと思った」という感想が出ていた。積極的に学ぶことやディスカッションして学び合いをすることの楽しさが味わえたようである。改善した授業内



図5 学生の作成したポスター

容を受けた学生らにアンケートを取ったところ、「非常に良かった」「良かった」に回答した者が、107名中97名であった。自ら主体的に取り組む内容で大変さがあったとは思いますが、その分得るものが大きかったのだろう。

教員側も、学生の実習での学びの内容を以前と比較して深く把握することができたと感じている。実習における学生の学びがどのようなものかと理解が進めば、実習終了後に開講される2年次後期の授業の内容の更なる精査につながるのではないだろうか。

ただ、この取り組みは、学生一人一人の力に依るべき取り組みとなった。すべての学生が、保育者として最低限必要な力を身に付けられたかどうかはわからない。この取り組みを行った学生が実際保育現場に出て、どのようなところに十分対応できているか、また、力不足を感じているかを捉え、授業内容に反映していくことが課題となるように思われる。

### 3. おわりに

学外実習で保育現場を経験した学生は、存分に力をつけ、一回りも二回りも成長する。学生自身が“やり遂げた”という思いを持って学校に戻ってくる。しかし、決して“やり遂げた”わけではない。あくまでも保育現場へ出るための途中の段階である。

「保育・教職実践演習」は、学生の学外実習終了から保育者として現場へ出るまでの大切な期間に、実習での学びを生かしながらこれまでの学びを確実に身に付けさせる重要な科目である。保育職の大変さや責任の重さを自覚しながらもそれを乗り越え、子どもと関わる喜びや期待を大きく抱いて現場へ出られるよう、学生を育てていく必要があると考える。保育現場との連携を取りながら、「保育・教職実践演習」でおさえるべき内容についてさらに検討を進め、充実したものにしていきたい。

### 参考・引用文献

- 1) 生野金三・井口真美・田中正造編著『保育・教職実践演習 自己課題の発見・解決に向けて』萌文書林 2016年